

「コンビニ事変-前編」

—初稿—

2024/9/17

脚本 太郎

〈人物表〉

荒屋ヒトシ	(15) ↓ (17)	サヤカの彼氏
袖沼サトシ	(15) ↓ (17)	ヒトシとサヤカの共通の友人。
伊吹サヤカ	(15) ↓ (17)	嵐と凧の母。凧を溺愛している。
木原春人	(34)	ヒトシがかつてバイトしていたコンビニの 店長。
新人店員	(16)	
田原茂	(55)	木原の代わりとして派遣された店長代理。
高城足男	(55)	変態教師。サヤカにセクハラをしていた。

ログライン

退院したサヤカに話しかけるのを躊躇っていたヒトシが、サトシとの殴り合いを通して決意を固める。

ねらい

- ・ヒステリーを笑いに。
- ・緩い三角関係を描く。

1. 中学校・三階・廊下・窓の前(昼)

廊下に並ぶ、腰高の引き違い窓の内の一つ。

しばらくは生徒たちによる日常的な喧騒が聞こえて
いるだけ。

やがて激しくドアが開く音がする。

少女の絶叫と間隔の短い足音が聞こえ始め、徐々に
大きく。

血まみれのカッターナイフを片手に走ってきた伊吹
サヤカ(15)が勢いよく窓に激突。

窓が窓枠から外れてサヤカと一緒に落下していく。
数秒してサヤカの絶叫が止む。

『ドサツ』という音。

弾けるように悲鳴が起こる。

2. 中学校・三階・廊下(昼)

悲鳴はまだ続いている。

皆サヤカが飛び降りた窓の方を見ている。その中に
荒屋ヒトシ(15)と袖沼サトシ(15)も居り、
茫然としている。

何人かの教師たちが慌ただしく階段を下りていく。
いくつかの教室から生徒たちが出てくる。

悲鳴は止み、ざわめきが変わる。

ドアが開け放たれた生徒指導室から、出血した首筋
に手を当てた高城足男(55)がゆっくりと這い出
てくる。

しばらく誰も高城に気付かない。

やがて皆が高城に気付く、先ほどよりは控えめな悲
鳴が上がり、ざわめきも大きくなる。

一人の女性教諭が高城に近付き、しゃがみこむ。

女性教諭「高城先生！ 何があったんですか？」

高城「……ませて……」

女性教諭「え？」

高城 「死ぬ前に、最後にもう一回だけ……おっぱい揉ませて……」

女性教諭「(嫌悪と困惑を滲ませて) は？ ……はああ？」

3. 高校・教室(昼)

昼休み中、明るい喧騒に包まれている教室。

弁当を机で広げたり、教室を出ていく生徒たち。

テロップ「二年後」

荒屋ヒトシ(17)が袖沼サトシ(17)の机に手をつけて真剣な表情で言う。

ヒトシ「一生のお願いだ。サトシ、お金を貸してくれ」

サトシ「ためーの一生のストックは何個あるんだよ」

ヒトシ「頼む、昼飯も買えないくらい金欠だ」

サトシ「コンビニのバイトはどうしたんだよ」

ヒトシ「ばっくれたから給料は入らなかった」

サトシ「お前なあ……」

ヒトシ「いや違うんだ。やむにやまれぬ理由があったんだ。実は……」

4.

(回想)コンビニA・店内(夕)

レジでは会計中、店長である木原春人(34)が新人店員(16)を詰めている。

客は無言で終わるのを待っている。

ヒトシが品出しをしながら、横目でレジの方を見ている。気まずそうである。

木原 「嫌がらせですか？」

新人店員「え、あの」

木原 「さつき教えましたよね。何で同じミス繰り返すんですか？ バカなんですか？ フラン卒なんですか？」

新人店員「え？ いや、まだ高校生……」

木原 「じゃあぼくを困らせるために、わざと間違えてるんですか？」

新人店員「え、いやそういうわけでは……」

待たされている客はイライラしている。

木原 「俺は結果主義者ですからね。たとえ悪意のないミスだとしても、結果的に俺に損害が与えられたのなら、それは俺への攻撃と見なしますからね。覚悟しておいてくださいね？」

新人店員 「えと、す、すいません」

木原 「は？ 何で今謝るんですか？ 会話噛み合っていないですよ。頭悪すぎませんか？」

新人店員 「あの……えと、本当すいません」

木原 「謝るってこと頭悪いのは認めるんですか？ やっぱFランですか？」

新人店員 「で、ですからまだ高校生で……」

木原、レジに手を付いて捲し立てるように、

木原 「君をその年になるまで排除できなかった現行の社会システムにも問題はありますが、それでも一番の責任は君にありますからね。次何かミスったら絶対自殺してくださいよ？ セルフ凌遅刑で」

新人店員 「そ、そんなぁ」

悲壮な顔の新人店員。

対する木原はニカッと笑って、

木原 「獲物はボロボロの果物ナイフでお願いします！」

そして新人店員に顔を近づけ、

木原 「いってえぞ〜？」

汚く音を立てながら、舌で自分の口の周りを舐め回す。

その時、ずっと待たされていた客がしびれを切らした。

客 「おい、いつまで待たせるんだよ！ いい加減にしろよ」

木原、レジスターを投げ飛ばす。

木原 「うるっせーなぁ！ どいつもこいつもお！」

そして地団太を踏んで叫ぶ。

木原 「もう限界だよ何で俺がこんな仕事しなくちゃいけないんだよ！」

木原以外の全員がドン引きして硬直する。

木原、制服を脱ぎ捨てる。

木原 「これ以上お前らみたいなのFランに構ってられるかよ！
俺は早稲田志望だったんだぞ！」

新人店員 「志望？ あくまでも？」

木原、髪を掻きむしって悲痛そうに、

木原 「高校のときあんなことさえなければなあ！」

新人店員 「何があったんだろう……」

木原、レジを飛び越える。

木原 「とにかく本当の俺はこんなじゃねーんだ！ 俺は自分
を解放してやる！」

木原、ベルトを外してズボンのチャックを下ろしながら外に飛び出していく。

ヒトシ 「店長？ 店長ー！」

5.

(回想) コンビニA・バックヤード(夕)

店員一同、田原茂(55)と対面して立っている。

田原は見るとからに生氣のない中年男である。

テロップ 「二時間後」

田原 「急遽店長代理を承ることになった本社で社内ニートやってる田原です」

田原、軽くお辞儀をする。

店員たちも軽くお辞儀を返す。

田原 「前の店長は駅前で自分の陰部を撮影した写真をポケットティッシュみたいに入れてたところを捕まりました」

ヒトシM 「店長——！」

田原 「最後の言葉は『前科なんて怖くねえ。どうせ俺みたいなゴミは生きてるだけで犯罪者扱いなんだ』だったそうです」

ヒトシM 「店長——！」

店員一同、呆然としている。

ヒトシM 「凄いスピードで狂気が展開していったと思ったら呆気なく収束した……」

6. 高校・教室(昼)

ヒトシ「それでその店長代理もそのあとクレマーの頭にレジスタ―叩きつけて逮捕されちゃったんだ。ぼくはもう怖くなくて逃げたよ」

サトシ「お前話盛ってるだろ?」

ヒトシ「盛ってないよ。君は観てないかもだけどニュースにもなったよ」

サトシ「そっかあ。うーん……まあ、春だからなあ」

ヒトシ「春というのは恐ろしい季節だよ」

サトシ「(遠くを見るように) サヤカが飛んだのも春だったしな」
ヒトシ、咎めるようにサトシを睨む。

ヒトシ「やめろよそんな話」

サトシは無視するように椅子を立ち上がり、教室の出口へ向けて数歩進む。

そして立ち止まり、ヒトシを振り返る。

サトシ「ところでヒトシ、金を貸してやっても良いが一つ条件がある」

ヒトシ「条件?」

サトシ「どうせまたいつものコンビニに行くんだろうが、だとしたら今日こそあいつに何かしら話しかけるよ。タイミング逃すとどんどんストーカーじみていくぞ」

ヒトシ、ギクリとして、

ヒトシ「お前に言われなくて……」

サトシ「そう言っただけで『袋いりますか?』『アツアツだだだだだ大丈夫です』以外の会話してないだろ」

ヒトシ「いくら何でもそこまでもってはないだろ」

7. コンビニB・店内(昼)

レジにヒトシとサトシが並んでいる。

店員である伊吹サヤカ(17)がヒトシの商品の会計をしている。どこかポーツとした雰囲気。

ヒトシはひどく緊張している。

サヤカ「……袋要りますか?」

ヒトシ「アツアツアツアツ……だ、だだ、だだだだだだ大丈夫」

夫ですう」

サトシM「悪化してんじゃん」

サヤカ「……レシートは要りますか？」

ヒトシ「け、けけけけ、結構でしゅう！」

ヒトシを後ろから睨み付けているサトシ。

それに気づいてギクリとするヒトシ。

ヒトシ「あつ、あのー！」

サヤカ、首をかしげる。

サトシ、期待する表情。

ヒトシ、苦笑いでレジに置かれたおにぎりを差し出して、

ヒトシ「おにぎり温めてください」

サトシ、顔をひきつらせる。

サヤカ、何か言いたそうにしているが何も言わない。

8. 商店街（昼）

地方都市的な小規模な商店街。控えめなアーケードで覆われている。

立ち並ぶ店々の内の一つにコンビニがある。

そのコンビニから出てくるヒトシとサトシ。

二人は速足で歩きながら言い合いを始める。

サトシ「なくても今すぐ金を返せお前は！」

ヒトシ「話しかけただろ！」

サトシ「十割事務的い！しかもおにぎり温めるって何だあんま

聞いたことないぞ」

ヒトシ「何だ君はおにぎり温める派の人間には人権がないとでも

言うつもりか？」

サトシ「そこまで言っではないだろうが！」